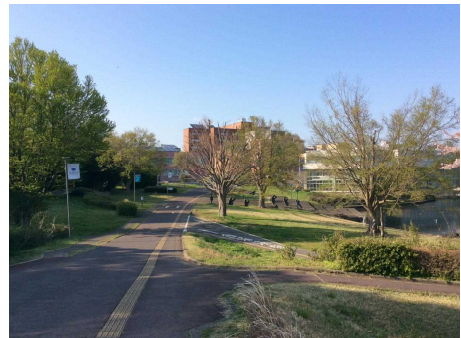


◆ 感性を大切にすること ◆

手元に1冊の手垢にまみれた本がある。『学校心理学』（石隈利紀著・誠信書房）。「教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス」というちょっと長い副題がついている。今でも時々ページを繰る。あまりにも多く開いたために、一部が損壊しかけているが、特に昨年度から続くこのような状況になってからは、以前にも増して見返すことが多くなった。

ちょうど20年前の今頃、東京と地元、2つのキャンパスを
行き来しながら教育相談関係の報告書作成に追われていた。その学校で担任として二回り目の卒業生を見送った後の時期であったが、何ともいえない「壁」のようなものを感じていた私は、再び母校で学ぶ機会を得ることができた。その際の指導教官が、著者の石隈利紀先生。よくカラオケをご一緒させていただいた事を思い出す。



この機会に学ばせていただいたことの一つに「（子どもの）感情に焦点をあてること」がある。先生は「子どもの世界を理解するときに、子どもの感情に注目することが大切」と説く。そのために、「教師はカウンセラーは感情を表す語彙をたくさんもつ必要がある」と続ける。『学校心理学』には、この感情を表す語彙のリストがついている。このページを見直し、自分のリストが錆び付いていないか、時々チェックするようにしている。

この本のなかに、大事にしている言葉がある。

「意識的に自分の感性を大切にしなければ、自分や子どもの感情を理解することは困難である。」

我々も含めて、子どもたちにはとても厳しい状況が続いている。どこかに灯りを見出したいが、そのヒントがここにあると考えている。

意識的に自分の感性を大切にしよう。

日々触れる風景、何気ない会話、窓から流れ込む風等々、それらを意識的に感じることで違った色が立ち現れることがある。これまで掲載したこの一連の「校長メッセージ」で、例えば「音楽」を話題にした拙稿によく「感性」を・・・と書いているのも、ひょっとするとこういったことを潜在的に意識しているのかもしれないな、と改めて思った。